
DOLLS ~ ドールズ ~

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOLLS（ドールズ）

【Nコード】

N7008Y

【作者名】

そら

【あらすじ】

久々津町に住む、至って普通の高校生^{あやめ} 青柳俊二^{しゅんじ}はいつもと変わらない日々を送っていた。

だが、ある日俊二は奇怪な声を耳にする。

——助けて

この声を頼りに屋上に辿り着いた俊二が目にしたものは血まみれの

少女と武器を持って佇む男だった。

一体目 出会い

「いやっ…来ないで！」

目の前には見知らぬ男が武器と思われる鎖鉄球を持って迫ってきている。

なぜ私はここにいいのか、なぜこんな事になっているのか分からない。

ただ意識が覚醒した時には私はここにいた。

「なんで…？」

誰に問いかけるわけでもなく疑問が呟きになって唇から漏れる。

すると、目の前の男が呟きに気付いたのか、反応する。

「なんでって、そんなこと別にお前が知る必要ないんだ…よ！」

言葉が終わると同時に男が軽々と1mはある鉄球を片手で振るう。

鎖が独特の音を響かせ、全て伸びきる頃には鉄球が私の身体まで到達してくる。

それとともに私の身体は重量感と強い衝撃に襲われる。

「うつ…」

轟音と共に私の身体は背後の障害物にがむしゃらに叩きつけられた。ぐにやり、と障害物が私の身体の形に合わせて曲がる音が聞こえる。

「か…はっ」

途端に息が苦しくなってくる。さっきの攻撃で身体が相当なダメージを受けたらしい。

真っ赤な鮮血が雨のように身体から滴り落ちる。段々、意識まで朦朧としてきた。

…なんで私はこんな目にあっているの？…何も覚えていないのに。…何で？

薄れゆく意識の中で誰かに届く事を信じて言葉を紡ぐ。

誰か…誰か…

「助けて…」

「はあー」

大きな溜息を対照的な小さな口から放つ。

今は世界史の授業中、老教師の歴史に関するトリビアを聞き流しながら窓際の席から外を眺める。

俺、青柳俊二はここ久々津町に存在する柳林学園に通う普通の高校生。

特に秀でたものは無い。体力、頭脳共に平均レベル。

顔も人並みだと思う。彼女なんてものはいたことないけど。

まあ、変わったところがあるとすれば、

両親が俺が小さい頃に事故で他界して、今は俺一人で両親の残してくれたお金と家で生活している。

今時には珍しい家が隣同士で幼少時からの幼馴染がいること。

それと今、俺の隣りの席で教室の半数には聞こえるであろう大きな

いびきをかいているこいつ、柿本夕と友人ということだ。

ただ俺が変わってるわけじゃなくてこいつが変わってるだけなんだけど、まあそれは後で追々話す事にする。

なんて、余りの暇さに誰が聞くでもないが長々と自己紹介をしている。もちろん心の中でだ。

——それでは今日はここまで

お、ちょうど授業も終わったみたいだ。老教師が荷物をまとめて教室から出て行く。

さて俺も飯の準備…の前に隣のうるさい奴を叩き起こさないとな。クラスにも俺にも騒音が迷惑になって仕方がない。

「おい、こら起きろ」

さっきの宣言通り、振り上げた手を勢いよく脳天に合わせて叩き落とす。

鈍い音が辺りに響き、じんわりとした痛みが俺の手に響く。

少しやりすぎたかもしれない…

「まあいいか。夕だし」

「よくないよ！ 痛いよ！ しかも夕だしって何！？」

起きぬけから元気な奴だな、寝てたと思ったらいきなり飛び起きたよ。

そしてどうやらさっきの眩きは心の中だけに留めておいたはずなんだが声に出していたらしい。

「気にするな、ただの本音だ」

「ヒドイ！ ヒドイよ！ せめてもう少しオブラートに包んで！」

うるさい奴だな、我が友人ながら鬱陶しく感じてきた。
まあ今のは冗談のつもりだったんだが、こいつは寝起きなので本気に捉えているみたいだな。
これ以上長引かせると昼飯の時間が無くなってしまっ、そろそろ終わらせるか。

「ねえ！ さっきの言葉嘘だよ！ 僕たち親友だよ！」
「うるさい、落ち着けさっきのは冗談だ。さっさと飯食うぞ」
「あ…なんだ冗談かビックリした…まあ僕と俊二の仲だもんね。
そんな事あるわけない！ 学食でパン買ってくるから待って！」

僕以外の奴と食べるなよ」と反吐がでそうなセリフを笑顔で吐いて
夕は教室から出て行く。
…一人になって初めて気づく。クラスメイト、特に女子からの変な視線が怖い。
くそ、あいつ帰ってきたら全力で無視してやる。

「さて、どうするかな？」

夕を全力無視しながら昼飯の時間を堪能し、教室から出てくる。
後方の教室付近から聞き覚えのあるような謝る声が聞こえる気がする。
満腹になって眠くなったことによる幻聴だろう。きつとそうだ。
当てもなくふらつくかなーと残りの昼休みをどう有効活用するか考えていると

――助けて

「!？」

なんだ！？今の！脳に直接語りかけてくるような感覚。

辺りを見回してみるが、俺の近くに人はいないし、さっきまでいた気配もない。

じゃあ今のは一体誰が！？ああ駄目だ！頭が混乱して思考が働いてくれない。

まずは落ち着け…考えるのはそれからしよう。

落ち着くためには深呼吸だ。息を吸い込み小さく吐きだす。

「ふつつ、落ち着くまではいかなくても気休め程度にはなったか？」

さて、さっきの声？について考えてみるか。

とは言っても情報なんてものはさっきの奴しかないんだけど。

この際誰が言っただかなんて関係ない。何処から聞こえてきたかが重要だ。

場所が分かれば声の主もそこにいるはずだから。

……………

「だが、分かん」

当たり前だ。俺はどこぞの天才探偵でもないし、ましてや超能力者でもあるまいし。

一端の学生の俺には色々と無理がある問題だ。

少し気になるが分からないものは仕方がない。諦めて教室にでも戻って昼寝するか。

そう思つて教室の方向へ踵を返そうとした瞬間。

「ねえねえ、さっき屋上で何か変な音しなかった？」

「ん？ 何か、工事でもやってるんじゃない？」

「そっかー、まあ別にいつか。それでね……」

ふむ、屋上か…行つてみる価値はあるな。

これで駄目なら諦めよう。これが吉と出るか凶と出るか…少し楽しみだ。

屋上への階段を駆け上がる度に気持ちも弾む。

何かありそうな予感がする。子供の頃に戻った気分になる。

案外俺も子供なのかもしれない。

二体目 覚醒

目の前には錆びついた重量感溢れる鉄の扉。

すなわち屋上と校内の境界線。その前に俺は立っている。

しかし、向こう側からは何も聞こえてこない。やっぱ間違いだったのか。

まあ、確認だけでもしておくかな。

そう思い、ずいぶん古めかしいドアノブを捻る。

錆びついて重くなった扉が音と共に開いていく。

人間誰しも非日常の場面に遭遇した時には、

一瞬思考が停止して決められたテンプレート通りの言葉を出す筈だ。

「何…これ」とか「どういうこと？」なんてそんな感じの言葉を。

「何だよ…これ」

そういう俺もその一人。

扉を開くと、そこには…ありえない光景があった。

それは一言で表すなら「地獄絵図」

コンクリートで出来ている筈の地面は所々が重機を使ったかのように碎かれ、

転落防止用のフェンスは一部だけだがその姿をあり得ない姿に変えている。

極めつけは辺り一面血の海。

そしてその血液の根源であろう人物が自分の身体の形通りに歪んだフェンスに礫状態にされていた。

しかも、その人物は身体の大きさなどから見ても明らかに少女にしか見えない。

「…っ！」

あまりの残虐さに思わず目を逸らしてしまう。

一体この光景は何なんだよ！

なんでこんなことが普通の高校の屋上で起こってるんだ…。

「んだよ、誰か来たのかよ？」

「！？」

いきなり屋上の奥の方から声が聞こえる。

恐る恐る扉を盾に覗いてみると。

さっきは扉が死角になって見えなかったがどうやら人がいるようだ。

「おい！そこにいんだろ！出てこいよ！出て来ねーなら……殺すぞ」

ヤバイ！本能がそう訴えてくる。

だが、恐怖で身体がすくんで動かない。でも出て行かないと…。

「……………」

無言で身体を露見させる。心臓の鼓動が尋常じゃない早さで刻まれていく。

そこにいたのは、銀髪で長身の少し痩せ形で、年齢も俺と大して変わらないぐらいに見える男がいた。

ただ一つ、決定的に違っていたのは自分の身長のは半分はあろうかという1m程の鎖が付いた巨大な鉄球を手に持っていた事だ。

しかも服が返り血を浴びている。恐らく…いや確実にこの男が少女

をやったに違いない。

「お前が…やったのか？」

少女の方を向いて男に問いかけてみる。

「ああ。それがどうかしたのかよ？お前もあんな風になりたいのか？」

そう言つて鉄球をまるで風船を持ち上げるかのように軽々と片手で持ち上げる。

一体どういう原理だつたらあんな事が可能になるんだよ…。

「どうして、あんな小さな女の子をあそこまでする必要があつたんだ？」

「んだよお前…んなことはお前には関係ないことだ。あまり詮索が過ぎると…死ぬぞ」

狂気に満ちた眼でこつちを睨んでくる。どうやら冗談ではなさそうだ…。

だけど…

「確かに関係はないかもしれないが、この状況を見過ごせるほど出来た人間じゃないんでね」

「いいのかお前？さっきの言葉俺への挑戦と受け取るぞ？」

口調はさっきまでと変わらないが、明らかに自分の身体が震えているのが分かる。

今なら、泣いて土下座でもして許しを請えば、助かるかもしれない。

でも、例え死ぬとしても、意味がなかったとしても、『あの少女を助けたい』、そう思ったんだ。

それに、これはあくまで俺の推測…というかほとんど想像に近いんだけど、さっき校内で聞いた声。

あれはこの娘が言った言葉じゃないかと思っている。

だったら期待には添えないかもしれないけど、俺は目の前の男に立ち向かってみようと思った。

だから…持てる限りの勇気を持って

「好きにしろ」

自分で決戦の火蓋を切り落とす。

「いい返事だ。覚悟…しとけよ」

割れる地面。舞い散る砂埃。飛び交う鉄球。

そんな状況の中、なんとか俺は生きていた。

いや、実際には生かされていると言った方が正しいかもしれない。明らかにあの男は攻撃をわざと外してきてる。自分が楽しむ為に。

「おいおい！さっきまでの威勢はどこいったんだよ？

逃げてるだけじゃ俺は殺せないぜ、さっさと反撃してみな！」

地面が揺れると同時に俺の身体スレスレに鉄球が叩きつけられる。

「うわっ！」

こいつはさっきからこうやって紙一重の所で攻撃を外してくる。

ただ、無傷で済んでいるかといえばそんな事はない。

「はあはあ…はあ」

地を砕く程の威力だから当然砕けた破片が飛ぶ。

それが身体に突き刺さり、じわじわと痛みが体中に広がる。

それとともに体力もどんどん削られる。

精神的疲労も大きいな。いつ攻撃が当たるか分からない中ただただ逃げ惑う。

今の俺の状態は言つなれば満身創痍。

正直、力量がありすぎた。一度も攻撃にまわることができない。

しかもあいつあんな鉄球振りまわして、息一つ切らしてねえ。

ホントに同じ人間なのかよ？

それにもう一つ疑問が

「なんで…こんなことになってるのに俺以外に誰もここに来ないんだよ…」

そうなぜかいくら地面が砕けようと轟音がしようと全く人が来る気配がしない。

「それはな、俺らの能力みたいなもんだ。聞きたいことはそれだけか？

だったら…そろそろ飽きてきたな。…おい、今から殺すわ」

淡々と殺人予告をした男が鉄球に触れる。

すると、鉄球がみるみる間に膨らんでいく。

おいおい、冗談だろ…なんだあのバカでかい鉄球は。

3m超に膨れ上がった鉄球を引きずりながらこっちへと走ってくる。

鉄球が引きずられる度に地面が抉り取られていく。
今までののは完全にお遊びだったってことか…

あーなんかかつこ悪いな俺。

最初だけカツコつけてあの娘守る、みたいなこと言ってさ。
いざ戦いになるとただただビビって逃げるだけ。

だったら最初からそんなこと言うなって言いたいよな、数十分前の俺に。

あいつ倒せなくてもせめて、あの娘だけは助けたかったな。

隣のフェンスで未だに意識を失くしている少女に向かって謝る。

「ごめんな、偉そうに助けるとか言っつて。ホントは助けたかったんだけど。」

俺の完全な力不足で……だから罪滅ぼしって訳じゃないけどさ…
君を一人では逝かせない。俺も一緒に…」

謝罪の途中から涙で視界が滲む。死ぬことに対してというよりは少女を守れなかった事に対してだ。

俺に力があれば…この娘を助けることが出来たかもしれない。
でもそんな漫画みたいなことはそうそう無い。

だから、もう一度。今度は少女の頬を両手で包みこみ、面と向かって

「ごめんな…」

涙で歪んだ顔で謝罪する。

「おい、もうお涙頂戴の展開は終わりか？待ってやった俺に感謝しろよ」

男が腕を思い切り振りかぶると腕に巻きつけられた鎖が伸びる。

「だが、俺はここで見逃す程甘くはない。仲良くそのガキと死にな
！」

そのまま腕を振り下ろすと鉄球が宙を舞って俺たちの頭上に降って
くる。

ああ、ここで終わりか…。

ドクンッ！ドクンッ！

！！

なんだ！？変な感覚が身体を支配してくる。

身体が熱い。だが、不思議と感覚が研ぎ澄まされる。

周りの風景が止まったように見える。まるで世界が停止したかのよ
うに。

「これもあいつの能力なのか？」

そう思って男の方を見ても男も停止している。じゃあ一体だれ
が？

いや、今は考えるのはやめよう。

それよりさっきから頭に変な知識が流れ込んでくる。

戦いの知識、何かの能力についての知識。

これは…俺の能力…なのか？

流れ込んでくる知識を元に推測する。

仮にこの能力が俺の物だとしたら、もしかしたら…少女を助けられ
るかもしれない！

流れてきた知識によるとこの今の停止状態。これもどうやら俺の能

力の一つらしい。

これは時間の流れを極端に遅くしているらしい。
ようするに停止というよりは超スローモーションの状態ということだ。

ただし、このスローモーション状態、一分しか持たないみたいだ。

既にこの状態になって30秒は経っている。

だったら残りの時間でまずはこの娘を安全な場所に。
フェンスから少女を助け出し優しく抱き抱える。

もう一度だけ最後の謝罪をする。

「助けるのが遅くなってゴメンな。でも今度は絶対に助ける。約束する」

そう言つて足で地面を蹴る。すると身体が風のように軽く風のように速く移動する。

これが俺の能力の、身体能力と感覚の一時飛躍的上昇だ。
少女を屋上の離れた隅の方に寝かせる。

「すぐ終わらせてくるから、待ってる」

そう言い残し、地面を蹴ってさながら瞬間移動のように男の元へ向かう。

轟音が響く。時間が来てスローモーションが切れたようだ。
男は今となつては到底的外れの場所に鉄球を叩きつける。

「ふんっ、俺に刃向かうからこういう事になるんだよ」

満足げに呟く男の背中に向かって言ってやる。

「それは誰に向かって言ってるんだ？」

男がビクツと一瞬身体を震わせこちらを向く。

「なっ！？どういうことだ！？お前は確かにあのガキと一緒に殺したはず……」

「ああ、俺もそのつもりだったんだが何故かこうして生きている。もちろんあの娘もだ」

「……………なるほどな、そういうことか。」

「何がだ？」

男は一人納得したように呟く。

「お前には関係ねえよ。ただし、こうなった以上お前も完全に生かしておけなくなった」

「どういうことだ？……………うっ！」

急に身体が物凄い衝撃に襲われる。

鉄球が身体全体を覆うようにのしかかる。

「うああああ！！」

そのまま思い切り屋上の向こう端まで吹き飛ばされ、壁に身体が叩きつけられた。

「ぐあっ！はああ、今のは一体……」

痛みが残る身体を引きずって立ち上がる。

能力のおかげでなんとか生きているが無かったら確実に死んでいた。しかも能力があったとはいえ無防備だったところを突かれた。

それだけ今回は本気ということか。

「考え事なんてしてるとあつという間に死ぬぞ」
「！！」

耳元で奴の声が響く。反射的に足を前に蹴りだす。

鉄球は俺の身体がさつきまであつた所をすりぬけフェンスに直撃した。

グシャ！、フェンスが歪むどころか突き破られている。

奴の身体能力もさつきより格段に向上している！？

確実に力は増し、移動力も俺と同じくらいになっている。

けど、俺もいつまでもやられてるわけにはいかない。

まずはあえて奴との距離を縮める。鎖しかない部分に潜り込めば、一発お見舞いしてやれる。

この勝負、お互いに一発で決まるに違いない。

俺はさっきの一撃がかなり負担になってる。

それに奴も本気を出してからか目で見えるほどに疲れてきている。先に当てた方の勝ちだ。

「ふうー」

息を吐いて落ち着く。

奴もそれが分かっているのか動きを止めて息を整えている。

お互いに体制が整ったのか相手を睨みつける。

ここからはスピード勝負。どちらがより速く攻撃に転じるか。

.....

額に汗が滲む。どれくらい経っただろう。

まだ1分ぐらいしか経っていないだろうにもう数分たったように感じる。

――刹那

視界から奴の姿が消えた。

「しまった！出遅れた！」

急いで地を蹴る。身体が前に思い切り進む。

しかし、既に目の前には黒い鉄の塊が押し寄せていた。

「これで、終わりだな！死ね！」

また守れないのか？――いや今度は絶対に守るって約束した。

「俺は…負けられない」

右足を軸に横へ方向転換して左足を思い切り蹴りだす。

鉄球はそのまま空を切り鎖は虚空へと伸び続ける。

「なんだと！？あの距離でこの攻撃を避けただと！？」

さらに方向転換。今度は奴に向かって。

地面を蹴る。何度も何度も。速く、もっと速く。

身体を捻り、拳を後ろに引き戻す。

「これで決まりだ！」

走り続けたままスピードを落とさずに拳を振るう。

拳が何かにぶつかる感触。そのまま腕を目一杯伸ばす。

風を切る音とともに奴の身体は皮肉にも自分が少女を叩きつけたフ

エンスへと叩きつけられる。

「ぐっ！くそがあー！やるじゃねえかよ…はあはあ」
「はあ…はあ」

返事をしようにも疲れきって言葉が出せない。
お互いに、そのままの状態で息を整える。
しばらくして、落ち着いたのか男が

「おい、お前。名前教えろ」

と礼儀も何も関係無しに名前を聞いてくる。

「…青柳俊二だ。お前は？」

「銀だ。今回は俺の負けだが、次はこうはいかねえ」

そう言うのと銀と名乗った男はそのまま自分でフェンスから抜け出し
屋上から飛び降りた。
普通なら驚くところだろうけどさっきあんな死闘をした後だ。あいつ
があれぐらいで死ぬはずない。

「はあーやっと終わった。身体中が痛え」

力を使い果たし今は只の高校生に戻った俺は、ふと少女のことを思い出す。

「あ、そういえばあの娘大丈夫か！？病院とか連れて行かないと！」

「あ、あのー…」

「ってよく考えたら俺も怪我してるし！って…ん？」

「あ、あのー大丈夫ですか？」

声のする方へ振り返ると…あの少女がいた。しかも無傷で。

改めて見てみるととても整った顔立ちをしている。

子供らしく二つに結った髪、雪のように綺麗な肌、もじもじとさせている指も細くしなやかだ。

ってそんなことより！

「なんで君、無傷なの！？さっきまで瀕死の重傷だったはず！」

「あ、はい。そうだったんですけど、私回復の能力があるんです。だから意識を取り戻してからはずっと治癒してました」

ほら。と言って俺の傷口に手をかざす。するとみるみる内に傷がふさがっていく。

「おおっ！！すげえて、そういえば何で君こんな所にいたの？」

兼ねてからの疑問を少女に対してぶつけてみる。

「それが…私記憶が全くないんです。今までの。残っている記憶は能力の使い方だけで…」

返って来た返答は予想を遥かに超えていた。

「え！？何も？全く？」

「はい、名前すら…」

それはまた難儀な…。とここで重要な事に気づく。

「あれ？ってことはもしかして帰る家も…」

「はい…」

今にも泣きそうな声で返答する少女。これは大変だな…

あいつに頼んでみるか？

いやでもこの娘連れてつたら、見た目まだ中学生だから確実に変な眼で見られるよな…

「うーん」

必死にこの娘をどうするか考える。

夕の所は？…いや駄目だあいつにだけは任せられない。

ちらつと少女の方へ目を追いやると涙目でこつちを見つめていた。くっ！あんな目で見られたら…仕方がない。最終手段を使うか。

「なあ」

「は、はい？なんでしようか？」

「もし、もしもよかつたらだ。俺の家に来ないか？」

「ふえっ？」

「俺さ一人暮らしだから他に誰もいないし、俺も全然構わないからさ」

「ホントに…ホントにいいんですか？」

「ああ、構わない」

「ふええっ！！ありがとうございますー！！」

遂に涙が溢れてしまった少女はそのまま俺の所へと飛びついてきた。

「のわあっ！」

やれやれ、これから騒がしくなりそうだ…

そう言いつつも俺の顔は綻んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7008y/>

DOLLS ~ ドールズ ~

2011年11月21日06時53分発行